

令和 5 年 6 月 18 日現在

機関番号：34306

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00048

研究課題名(和文)『分析手帖』と『マルクス=レーニン主義手帖』 60年代フランスにおける学知と革命

研究課題名(英文) The Cahiers pour l'Analyse and the Cahiers marxistes-leninistes: Science and Revolution in France in the 1960s

研究代表者

坂本 尚志 (Sakamoto, Takashi)

京都薬科大学・薬学部・准教授

研究者番号：60635142

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、20世紀のフランス思想の発展を、「概念の哲学」の目的である「学知」の探究と、マルクス主義の最終目的である「革命」の関係がいかなるものであるかを、『分析手帖』と『マルクス=レーニン主義手帖』という、68年5月直前の時期に高等師範学校生が刊行した二つの雑誌を出発点に理解することを目的とした。

この二つの雑誌の内実と両者の関係を、査読論文等において明らかにするとともに、それらが位置する知的文脈としての「概念の哲学」に関連する論点についても共著等において検討した。さらに、本研究に関連する著作の翻訳を行い、詳細な解説とともに刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまで存在は知られていたものの、その内実が明らかではなかった『分析手帖』と『マルクス=レーニン主義手帖』の関係性を、両者のテキストに基づきつつ解明した。これによって、1960年代のフランス思想における「概念の哲学」と政治的なものの錯綜した関係を明らかにするとともに、この二つの雑誌が刊行された時代の思想的背景を理解することも目指した。具体的には、フーコー、カンギレムといったエピステモロジーの系列に属する思想家たちと二つの『手帖』に共通の問題系を考察することによって、1960年代のフランス思想を立体的にとらえ、新たな理解を提供した。これらの点に本研究の学術的・社会的意義が存する。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to understand the development of French thought in the 20th century in terms of the relationship between the search for "the Science", the goal of the "philosophy of concepts," and the Revolution, ultimate goal of Marxism, starting from two journals, the Cahiers pour l'Analyse and the Cahiers marxistes-leninistes, published by the Normaliens (students at Ecole Normale Supérieure) in the period just before May 68. In addition to clarifying the substance of these two journals and the relationship between them in articles for publication in peer-reviewed journals, we have also examined issues related to the "philosophy of concepts" as the intellectual context in which they are situated in co-authored articles and so forth. In addition, we have translated works related to this research and published them with detailed commentaries.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：概念の哲学 『分析手帖』 『マルクス=レーニン主義手帖』 フーコー カンギレム エピステモロジー
— マルクス主義 精神分析

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

理論的背景：20世紀のフランス思想は、フーコーによれば精神分析、エピステモロジー等の「概念の哲学」と現象学、実存主義等の「主体の哲学」の対立軸を基本として展開してきた (Foucault, 1985; Cassou-Noguès et al., 2009)。本研究開始当時より、「概念の哲学」に属する思想的潮流に関する研究が進んでおり、スピノザとの関係 (上野他 2017) をはじめ、「概念の哲学」が哲学史の多様な問題と接続することが明らかになっている。

政治的背景：第二次世界大戦後のフランス思想において、マルクス主義との関係は根本的な重要性を持っている。戦後の共産党の思想的・政治的覇権は、1956年のスターリン批判の衝撃によって終焉した。その後、マルクス主義者たちの間で「真のマルクス」をめぐる論争が生起し、さまざまな革命の可能性が構想されることとなった。特に60年代のマオイズムの隆盛は、68年5月以降に重要な役割を果たした (Hamon and Rotman 1987; Bourseiller 2008)。

理論的、政治的という上記の二つの背景は、それぞれある時代の異なる出来事のレベル、その変容のリズムを対象としているために、理論的次元あるいは政治的次元の一方を主として描き出される傾向にある。しかし他方で、そうした通史的な手法は、理論と実践の関係について、個々のテキストの内実を踏まえて深く理解するためには最適な方法ではない。

研究開始以前より、研究代表者である坂本は、アルチュセールに学んだ高等師範学校生たちが結成したエピステモロジーサークルの雑誌『分析手帖 Cahiers pour l'analyse』(1966-69年、全10号)が、60年代後半に、ラカンの精神分析、アルチュセールのマルクス読解、バシユール、カンギレムたちのエピステモロジーを統合し、新たな「学知 la science の理論」をいかにして作り上げようとしたかを分析してきた (坂本 2015, 2016, 2017)。雑誌という知的生産の場を内在的に分析する過程で、『分析手帖』という思想運動を規定しながらも、その運動の内部においては不可視の要素が明らかになった。それは「政治的なもの」の次元である。『分析手帖』の刊行メンバーは、共産主義学生同盟所属の高等師範学校生の雑誌『マルクス=レーニン主義手帖 Cahiers marxistes-léninistes』(1964-68年、全17号)の主要メンバーでもあった。しかし、文学を扱った特集号が路線対立を顕在化させ、後にラカンの後継者となるジャック=アラン・ミレールをはじめとする数名のメンバーはエピステモロジーサークルを結成し、『分析手帖』を刊行することとなる。『分析手帖』と『マルクス=レーニン主義手帖』の対立は、高等師範学校というフランスの知的エリート養成の場における、「学知」の探究と「革命」の追求という二つの目標の交錯を鮮やかに示している。

このような経緯により、共通のアクターの存在にもかかわらず、『分析手帖』の中に政治的なものの直接的痕跡を見出すことは難しかった。エピステモロジーサークルは、政治的なものの外部で、「概念の哲学」の革新を目指していたように思われた。

しかし、同サークルのメンバーは68年5月の後、マオイストに合流し、プロレタリア左派 (GP) として政治的闘争を再開する。理論から実践へのこの回帰は、どのように可能であったのか。言い換えるなら、「学知」と「革命」には、潜在的にいかなる関係が存在していたのだろうか。「学知」と「革命」という二つのレベルがある種の距離を保ちつつ、いかに関連していたかを見出す必要があった。

参考文献

Christophe Bourseiller (2008), *Les maoïstes. La folle histoire des gardes rouges français*, Le Seuil.

Pierre Cassou-Noguès et al. (2009) *Le concept, le sujet et la science* Cavaillès, Canguilhem, Foucault, Vrin.

Hervé Hamon et Partick Rotman (2008), *Génération*, 2 tomes, Le Seuil,

Michel Foucault (1985), « La vie : expérience et la science », *Dits et écrits* (éditions Quarto), t. II, 2001, p. 1582-1595.

坂本尚志 (2015) 「現代思想」の系譜『教養としてのフランス近現代史』杉本淑彦、竹中幸史編、ミネルヴァ書房、2015年、245 - 260 頁

坂本尚志 (2016) 「他者とともにあること」の歴史性—フーコーと共同体の問い『共にあることの哲学—フランス現代思想が問う〈共同体の危険と希望〉1 理論編』岩野卓司編、書肆心水、209-245 頁

坂本尚志 (2017) 「構造と主体の問い—『分析手帖』という「出来事」『主体の論理・概念の倫理—20世紀フランスのエピステモロジーとスピノザ主義』上野修、米虫正巳、近藤和敬編、以文社、2017年、169-191 頁

2. 研究の目的

上記の背景のもと、本研究は、『分析手帖』と『マルクス=レーニン主義手帖』という、将来の知的エリートである高等師範学校生たちが刊行した二種の雑誌の間の理論的、政治的対立関係の分析を出発点として、1960年代後半から68年5月直前に至る「学知」と「革命」の関係性を

明らかにすることを目指した。

このような問題設定によって、60年代後半のフランス思想の展開を、マルクス主義の内的変容にとどまることなく、より広い文脈の中に位置づけることができる。具体的には、「概念の哲学」に属するエピステモロジー、精神分析などの関連である。アルチュセールのマルクス読解もまたこの潮流に属するとはいえ、マオイストたちの政治的実践を支える理論は、当時の理論的・政治的状況を反映した、より広範な影響関係のもとに形成されている。「概念の哲学」とマルクス主義が代表する「政治的なもの」との関係性をテキストの内在的読解によって明らかにすることが本研究の目的のひとつであった。

「学知」と「革命」あるいは「政治的なもの」の関係という問いは、68年5月前夜のフランス思想を理解する枠組みとして有効であるだけでなく、それ以前ならびにそれ以後のフランス思想を理解するための視座として機能する。こうした知と政治の関係については、フーコーが「知－権力」という形で図式化しているものの、知を考察の対象として扱う「概念の哲学」に対して、このような問いが提起されることは稀である。ゆえに、フランスにおける「概念の哲学」の政治的読み直しを進めるといふ点もまた、本研究の独創性を特徴づける目的であった。

3. 研究の方法

『マルクス＝レーニン主義手帖』と『分析手帖』双方の掲載内容とその変遷を比較しつつ、理論と実践という両誌の目的の違いがどのように誌面に現れているかを分析した。同時に、刊行に関与したメンバーたちが当時著したさまざまな形式の文書を収集、分析することにより、両者の隔たりと共通点を理論的観点から明らかにする。

上記の二つの雑誌の主要なアクターたちの思想と行動を理解するためには、先行研究の整理を行うだけでなく、当時の思想的・政治的状況を踏まえ、雑誌、パンフレット、宣伝ビラ、音声・映像資料等の、60年代後半のマルクス主義に関係する一次史料の分析を行う必要があった。史料調査は主にフランス国立図書館（BNF）、パリ第10大学現代世界図書館・文書館・博物館（La contemporaine）ならびに高等師範学校図書館において実施予定であった。

4. 研究成果

上記の方法に基づき、2019年には査読論文を刊行し、同年にはパリ第10大学にて資料調査を行った。その結果、共産主義青年同盟の活動や、『分析手帖』と『マルクス＝レーニン主義手帖』の関係について新たな事実を明らかにすると考えられる史料を多数発見できた。

しかしながら、2020年初めに端を発した新型コロナウイルス感染症の世界的流行によって、調査計画は大幅な変更を強いられることとなった。そのため、2020年度はフーコー、カンギレムといった思想家における「学知」と「革命」あるいは政治的なものとの関係を明らかにする作業を中心として行われた。これらの研究によって、本研究が対象とする1960年代のフランスにおける「概念の哲学」の発展がより立体的に把握されることとなった。

2021年度の研究活動は、新型コロナウイルス感染症の拡大による影響のため、既に収集した資料ならびに既刊の文献等の分析を実施した。特に、『分析手帖』と『マルクス＝レーニン主義手帖』の内容の分析を踏まえた上で、同時代のフランスの思想状況を立体的かつ複眼的に再構築するという目的のもとに、文献の整理・読解を進めた。

2022年度には、さらに、本研究が目的とする1960年代後半の思想状況を理解するために必要不可欠であると思われる英仏語の文献の翻訳作業を行った。このうち仏語文献1点（ギョーム・ルブラン『カンギレム『正常と病理』を読む 生命と規範の哲学』（以文社、2023年））は、詳細な訳者解説とともに刊行済みである。また、これまでの研究の成果を統合し新たな課題を発見することを目的として、2022年度中に京都大学大学院で特殊講義を実施した。今後も本科研費に関する複数の研究成果が刊行の予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 坂本尚志	4. 巻 1158
2. 論文標題 「想像的なものから美的なものへ ミシェル・フーコーにおけるフィクション」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 59-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takashi Sakamoto	4. 巻 51
2. 論文標題 De l'imaginaire a l'esthetique : les fictions chez Michel Foucault	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ZINBUN	6. 最初と最後の頁 49-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 坂本尚志	4. 巻 115
2. 論文標題 『分析手帖』と『マルクス＝レーニン主義手帖』 1960年代フランスにおける学知、革命、文学	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 フランス語フランス文学研究	6. 最初と最後の頁 255 269
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20634/e11f.115.0_255	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 坂本尚志
2. 発表標題 ウイルス、病、身体 統治と他性のフーコー的視座
3. 学会等名 2021年日仏哲学会春季大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Takashi Sakamoto
2. 発表標題 Foucauldian uses of history
3. 学会等名 長栄大學應用哲學系專題討論（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坂本尚志
2. 発表標題 「われわれ」とは誰か？ パレーシアする主体の存在論
3. 学会等名 「フーコー研究 人文科学の再批判と新展開」第6回例会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 小泉 義之、立木 康介ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 読書人	5. 総ページ数 208
3. 書名 狂い咲く、フーコー 京都大学人文科学研究所 人文研アカデミー『フーコー研究』出版記念シンポジウム全記録+（プラス）	

1. 著者名 小泉 義之、立木 康介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 590
3. 書名 フーコー研究	

1. 著者名 佐藤嘉幸	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 386
3. 書名 ミシェル・フーコー 『コレージュ・ド・フランス論集』を読む	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------